

# 島で出会つた石の文化…… モノ言わぬ石がモノを言う

佐藤嘉信（会員）



## 石の文化とともに生きる人たち

瀬戸内海の島に通い、石の世界に生きる石職人、石彫作家、石彫専攻の美大生、モノ言わぬ石にモノを言わせる職人技をもつ人たちに出会つた、石の文化に情熱を注ぐ人々の見聞録。

## サムライウォール

2017年「アメリカ南部ダラスで起きたロレックス本社ビルに日本の城を彷彿させる城壁が出現した」とのニュースに石の文化に関心をもつ私はここにもスゴイ人がいると心ときめいた。

この様子はNHKBSのドキュメンタリーになり、「サムライウォール」を検索すると今も動画を視聴できる。

施主はテキサス州ダラスにある不動産会社オーナーで、サムライに憧れる世界的な刀と甲冑コレクター、集めた兜の数は1300点に及び収集品を展示する美術館までつづった、サムライに憧れ続けている実業家。そのオーナーが新しいオフィスビルの構想を練つていて、日本の中の城の石垣を積む技能集団が比叡山のふもとにいると、教えてくれたのはアメリカ西海岸に住む日本庭園の専門家だという。栗田さんは2010年カリフオ

を継ぐ15代目。

設計図なしに巨石を積みあげる技をもち異国の職人に技を教えるながら、100日を越える工事で見事に仕上げた。

この様子はNHKBSのドキュメンタリーになり、「サムライウォール」を検索すると今も動画を視聴できる。

ルニアと2014年シアトルで石積みのワーキショップを開催し石積み技法をアメリカの石職人や石工に関心ある人たちに伝授している。

日本古来の石積技法伝道師、栗田さんが大切にしている穴太衆の教え「大きな石も小さい石も、それぞれに役割があり、無駄な石はない。それは社会と一緒にだ」。祖父の万喜二さんがよく口にしていた言葉だという。

## 石は世界共通の文化

石の歴史を紐解くと石器時代にも石は境界を示すものや、狩猟の武器や石斧や石刃などの生活用具、住居として、また石碑、石像、墓標、石棺、墓石、石甃、石橋、石柱、石垣、石庭など広く使われてきた。

世界各地の石造物を見ても エジプト

ではピラミッド、ローマ時代の石造都市や  
神殿・円形劇場、イギリスのストーンヘン  
ジの巨石、イースター島の巨石彫刻群、  
パルテノン神殿やエピダウロスの円形劇場、  
ペルーのマチュ・ピチュ、中南米ユカタン

半島のマヤ・アステカ遺跡群、カンボジア

のアンコール・ワット、ヨーロッパ各地の大聖堂、城砦建築などがある。

石材が豊富で乾燥地帯で寒暖の差が少  
ないところでは石造建築が発達した、ロー  
マ時代より石材を装飾材としても用いる  
ことが始まり、19世紀に鉄筋コンクリー  
トの開発とともに、石材はほとんどの場  
合装飾材として用いられるようになった  
ので、近世までは彫刻家と石工の区別は  
なかった。

日本では石器時代に道具として発達し  
たが、石材資源の乏しい日本は木の文化  
に始まっており、3世紀ごろ中国大陸や  
朝鮮半島から古墳文化の伝来とともに石  
造が入ってきたが進化せず、戦国時代に  
城壁の石積み技術が発達したものの建築  
の主流とはならず、明治に入つてヨーロッ  
パの石造技術が導入された。

## 石の島人たちに出会った

5年ほど前から瀬戸内海の北木島に短

期滞在を繰り返している。

ことの始まりは東京に住む友人の井手  
康二さんが少年期まで島で育った家が今  
は空き家になり、彼は外国為替スペシャ  
リストとして大活躍してきたがリタイア  
後は頻繁に帰郷し、男の隠れ家よろしく  
釣り三昧の島暮らしを楽しんでいる。來  
ないかと誘われ、思つてもいなかつた島  
暮らしを季節ごとに楽しむ機会を得た。

瀬戸内海には700余の島が点在して  
いる。笠岡諸島の一角にある北木島はJR  
山陽本線笠岡駅近くの波止場からフェ  
リーで50分。本州とは14キロ離れ、島民  
は500人。

花崗岩でできた島、かつて127か所  
の採石場がある石の産地だったが今は海外  
の安い石に押されて、石材加工工場の多く  
は廃業し建物だけが残っている。最盛期  
には1万人の島民がいて、笠岡市の税金  
の3分の1は北木島からと景気も良く、  
映画館など娯楽施設もあってぎわったそ  
うだ。石材業にも様々な役割があり、石  
山所有者、採石場、石工、輸送する石船、  
石碑の字彫り、加工、石磨き、石工具、  
島民は石にかかる仕事をしてきた人が多  
い。石とともに生きてきた。石材加工を仕  
事にする人は少なくなったものの活躍して  
いる凄腕の職人は今もいる。

## 悠久の時が流れる島

信号もコンビニもなく、歩行者も見か  
けない静かな島。散歩すると島人は初め  
て会った人には「どこから来ましたか」  
と必ずと言っていいほど聞いている。犯  
罪が起きた話は聞かないが、もし事件が  
あっても島民から情報が聞き出せるだろ  
う、とても安全な島だ。衝動買いするよ  
うな店は一軒もないでので、お金を使うの  
は食料品だけ、無駄遣いのない島暮らし  
である。島民を知り島暮らしの実情を知  
りたく町内会にも婦人会にも顔をだして  
話を聞いた。顔をだすうちに、島民から

北木石の歴史は、徳川幕府が再築した  
大阪城の石垣にまでさかのぼる。大坂城  
は、徳川幕府が西国・北国の大名63藩  
家を大動員して、元和6年（1620）  
から寛永6年（1629）の間に再建さ  
れた。

全国の大名たちは競うように巨大な石  
を運び、壮大な石垣を築きあげた。石に  
は刻印と呼ばれる大名の家紋が刻まれて  
いる。このとき、島の石材も大量に使わ  
れた。明治時代には、日本銀行本店や明  
治生命館などの日本を代表する西洋建築  
が建てられ、そこには北木島の花崗岩が  
使われた。

ニックネームで呼ばれる間柄になり、盆踊り、秋祭り、文化祭、介護施設訪問、草刈り、釣り、など島民と交流をし、市長とも知り合い市議会も傍聴し市職員研修も手伝うようになつた。

春には島で、元禄時代から続く伝統行事の流し雛がある。旧暦3月3日の満潮時に紙雛を乗せた小舟を海に流す伝統行事で女性は毎月1体の流し雛をつくり1年分12体の雛と、前後に船頭を乗せる。これにアサリ寿司や桃の花の小枝を添えて、浜辺から海へと流す。

お盆には源平合戦で亡くなつた人々を弔う、地蔵の周りでゆっくりしたリズムの盆踊り、唄い手は戦いの始めから終わりまでの情景を物語風に唄う。島では次の世代へ次の世代へと唄い継いできた。この唄や、遣隋使、遣唐使、源平、金毘羅参り、大阪城への石船などかつて行き來した瀬戸内海航路など悠久の時の流れを感じさせる要素がたくさんある。

### 滞在先は今や国際ゲストハウス

島にも外国人が出入りする、隣の白石島には外国人専用の宿泊施設もある。社交的な井手さんは日本人であれ外国人であれ、会えば「一杯飲みに来ませんか」と誘うので、男の隠れ家には珍客がよく

### アメリカ人彫刻家と島民は言葉の いらない交流

男の手料理で釣った魚をつまみに酒を飲み、ときには秋祭りの音頭を唄う。外国人にこの島の何が気に入つたのかと聞くと、ほとんどの人は「何もない島だからいい、古い日本がある、一杯飲みながら島民と話せるのが最も良かった」と言う。「コーヒーでもどうですか」と何度も職務中です、失礼します」と。お巡りさん以外は断られたことがない。

作家が知人のいない島に滞在する理由は「島は石の産地」「閉鎖した石材加工工場があり、工具や機械を利用できる。制作中の騒音の心配もない」「空き家が多く住むところがある」「学校もある」であった。シアトルから来た彫刻家もいた。石彫作家が知人のいない島に滞在する理由は「島は石の産地」「閉鎖した石材加工工場があり、工具や機械を利用できる。制作中の騒音の心配もない」「空き家が多く住むところがある」「学校もある」であった。島民が気づかなかつた、弱みと思つていたことが強みであつた。外国人に教えられた。

アメリカ人と島民の交流に言葉はいらなかつた。石とともに生きてきた島民ばかり、石の割り方、ノミの当て方、石の磨き方、石の移動も、専門的なことも島民の誰かがその道の達人、すぐに意気投合。ジェシー家族の住むメイン州の町スティーブンも海辺で、ロブスターで有名なところ、魚やヒジキは大好物。石の文化に国境はない。

鳴本さんは少年期に父親を石材運搬の操船中に事故で亡くすなどいくつもの苦難

来る。リタイヤ後ヨットで定期的にニュー・ジーランドから来るフェントン。アメリカから来て隣の島に住むジャーナリストのエイミー、日本文化を紹介する本、ジャパンタイムズなどのメディアに記事や寄稿文を書いている。音楽演奏や何でも屋をしながら島外から来て暮らす日本人クニさん、家族で毎春滞在するアメリカ人彫刻家のジェシー、韓国からは中学生グループが島の音楽祭に来て泊まつた。井手さん宅は外国人も島民も市長や市職員も来て談笑する気軽な国際交流のゲストハウスになっている。

島にやつて来る。家族で2か月空き家に滞在し石彫を制作するようになつた。ジェシーと妻の星野一美さんも彫刻家で子どもは島の小学校と幼稚園に通つた。

を乗り越えて起業し、今や日本有数の石材加工会社のオーナー経営者、石を知り尽くした人、アメリカ人彫刻家との共通語は石。2人の議論はデザインや石質、加工法など多岐にわたり面白い。でもビジネス談議になると厳しく意見する。

鳴本さんの石材会社は中国福建省にも工場があり、石材や加工機械の仕事でイタリア、中国、韓国、南米などにも出かけて交流が広い。イタリアから導入した石材加工機械は若い中国人社員がオペレー

ションしているグローバル石屋さんだ。今はしつかり者の息子さんの太郎さんに社長をバトンタッチして鳴本さんは地元商工会議所会頭として活躍している。

鳴本さんから「石の資料館をつくる、私は石に育てられた、北木島の石材文化を後世に伝えたい」と聞いた。しかも資料館創設は公的資金には頼らない。援助をもらうと、金を出すと口も出す、思うようになります。すべて自弁でやると聞いた。日頃から、モノの見方や考え方強い信念を感じていたが、身近にスゴイ人がいるものだと感激した。

## 石の文化で町おこし

その鳴本さんが陣頭指揮をとった運動

が2017年から始まった。石の島がある備讃諸島2市2町、笠岡市、丸亀市、小豆島町、土庄町が日本遺産認定制度を活用して町おこしをしようと立ち上がったのだ。世界遺産や日本遺産に詳しい専門委員を招いてパネルディスカッションが2回開催された。イギリスの産業遺産の専門家で世界遺産専門委員のニール・コソン卿からは開館したばかりの石の資料館や採石場を視察して登録の価値ありとのコメントがあった。

日本遺産とは、文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定し、地域活性化を目指す取組み。各島の島民が相互に瀬戸内海の石の産地塩飽諸島、小豆島を訪問するツアーが開催され私も参加した。他の島の島民も北木島に訪問した。漁民は港で大漁旗を振り、井手さんは石の資料館の館内説明を買って出て大歓迎をし、運動は盛り上がった。

2019年2年越しの運動が認められ日本遺産に認定された。

## 島に石の資料館が誕生

K's LABO（ケーズ・ラボ、通称：石の資料館）2017年10月オープン。石の資料館、レストランカフェ、貸し自

転車、貸し海遊び用具、お土産店のある複合施設。北木島の石材関係者から詳細な取材を続け、文献や写真が集められた。展示パネルで先人の足跡がわかる。かつての石材加工工場は見事に石の資料館とおしゃれな複合施設に変身した。

パネルの解説文は日英中の3か国語、英語は井手さんと私が、中国語は石材会社社員の中国人が訳した。「石材文化を後世に伝え、島を元気にしたい、石材産業の繁栄に貢献したい」「石のアートの町にしよう」と創業者の強い意志が形になり太郎さんが館長に就任し、次々新しい企画を連打している。

グランドオープニングでは「石割り」が実演され「石切唄」も披露された。石切唄は北木島で受け継がれている作業唄、まだ手作業で石を切っていた時代、石工たちが山から石を切り出し、石を割るときに唄っていた、伝統文化として保存会が継承している。

## 「北木島石切唄」

浪花名物 大阪城も 北木で運んだ石  
嫁に行くなら 石屋の嫁に 右も左も  
金ばかり  
山が高うて あの娘が見えぬ あの娘

可愛いや山憎らしや  
石屋すりやこそ 米の飯喰うが 親は  
ボロ着て麦を喰わよう  
ここで唄とたら 聞こようか見よか  
可愛いあの娘の膝もとへ

したことから、アメリカ人彫刻家ジェシーのいる東海岸沿いの石材事情を調査することとした。

アメリカ駐在経験を活かし私がツアーノ案内役を務めた。

ニューヨーク、ニュージャージー、ボストン、ニューハンプシャー、メイン州

ランチメニューに「せとうち鯛骨ラーメン」と名付けた笠岡ラーメンが登場した。タイの骨から取つただしが特徴。

ステーキはベースの鶏がらしょゆに、瀬戸内産のタイの骨と昆布を煮込んだしを加えた。具材は煮鶏とネギ、メンマと笠岡ラーメンの定番をそろえた。昨年、島で人気のラーメン店が閉じたのを惜しむ声を受け、瀬戸内らしさ、風味も良いタイを生かそうと考え、助言も得て仕上げた。1杯600円。1日20食限定。

## アメリカへ石材調査、石の文化交流

石の資料館 K's LABO がオープンした翌日、鳴本さん、石工具を扱っていた山本英介さん、井手さん、そして私の4人でアメリカ石材調査に出発した。

鳴本さんは「石は国を越えた人類共通の文化」との強い思いがあり、これまでイタリア、フランス、スペイン、東欧、中国など多くの国で石の文化芸術を見聞

日本人2名、アメリカ人3名、ニュージーランド人1名、マレーシア人1名のメンバーで構成。

## 島を思うアメリカ人彫刻家の作品

アメリカ人の彫刻家ジェシーが2001年2月から1か月半かけて空き工場で制作した作品名は「Wind-Swept」、彼が感じた北木島 Wind-Swept 「風に吹きさらされた」を意味する。

何度も訪れた北木島の印象を託した作品で、四方を海に囲まれ、自然や時代のどんな風にさらされても、逞しく明るく生きる「愛する人々と北木島」という思

いが込められた作品、オブジェは、表面に風の流れを刻み込んだ

1・25トンの2つの花崗岩を組み合わせており、岩を組み合わせており、

高さ1・8メートル、幅2・5メートル、奥行き1・5メートル、石の資料館入り口付近に据えられた。

4月2日の除幕式でジェシーは「作品は私が感じた北木島、多くの人の助けで完成できた」と挨拶、島民70人と祝った。



4月2日の除幕式でジェシーは「作品は私が感じた北木島、多くの人の助けで完成できた」と挨拶、島民70人と祝った。

## 美大生を募集し石彫シンポジウムを開催

アメリカ石材調査から帰国後、石彫シンポジウム開催のプロジェクトを立ち上げる。私もそのメンバーになった。石彫シンポジウムとは石彫作家が公開で石彫作品を制作するイベントで、バブル期には全国各地で開催されたようだ。地元の笠岡市では1989年から石彫シンポジウムを6回開催し、その石彫は笠岡駅前のメインストリートや彫刻広場に数多く設置され、市民が石の文化を育む歴史や風土がある。しかし、北木島の石材産業が活況を失い最後のシンポジウムから20年の時を経ており当時の情報は限られていることから、美術大学やシンポジウム経験のある石彫作家を訪問し教えを乞いながら、手探りでシンポジウム開催を具體化することにした。

しかし、出来上がった作品をどのように値付けし販売するのかなどわからないことばかり。石材会社オーナーの鳴本さんはアーティストに造詣が深く石彫作家や画家の友人、知人がおり、展示会や美術館には足を運んでいる。鳴本さんの知人が尾道で個展をするからと言われ見に行つた、人生で初めて接する石彫作家はイタリア在住の著名人、石のアーティストに何を話してよいのやら戸惑つたものだ。こんなことから石彫シンポジウムプロジェクトは始まった。

学生募集の大学訪問はマーケティングの専任教授をしていた私が担当し、首都圏の美大で石彫講座のある大学をリストアップし、簡単なシンポジウムの案内チラシを作成し、片っ端から飛び込み訪問した。幸いにも担当教授にお会いでき、「島に石の資料館がオープンしたこと」や「彫刻を学ぶ学生にチャンスを与えてほしい」と正直にお話ししていると正直にお話ししたところアドバイスもいただき、武藏野美術大学戸田裕介教授と東京造形大学井田勝己教授の推薦で5人の学生が参加してきた。



実行委員長の太郎さんの大活躍と学生の面倒をみた資料館の奥田さん、静ちゃん、ミッちゃん、インター生の松ちゃんたち5人の力は大きかった。多くの方に手伝っていただき有難たかった。島の一大イベントとなつた。

開会中に戸田教授と井田教授に遠方の島まで激励にお越しいただき作品完成に向けて一段と力が入つた。

石彫の作品お披露目会前に島のスピーカーを通してお披露目会の案内放送があり多くの島民が参加した。

資料館で研修中のインター生の松ちゃんが司会、石彫り名人の勝ちゃんが島民代表で挨拶し、石彫学生が自分の作品を解説した、若者の大活躍で高齢化が進む島民は元気をたくさんもらつたと言つた。公開制作を多くの島民が見学に来た。ベテラン石工だった水野さんたちがノミの当て方や道具の使い方、石の磨き方などをアドバイスした。またたくさんの方が学生に差し入れしてくださいなど微笑ましい交流をよく見かけたのは石の島ならではと言える。

ていた。

作品テーマは「自由」とした中で、5

## コロナでもできることを、石彫作家のドローン展

人の美大生が石彫作品に込めたことは、石川夏帆さん……つくるときは石と自分は距離ゼロ、島で体験することを込めて

金子典弘さん……島で彫ることで生まれる影響と作品の変化を楽しみながら

川口 祥さん……北木島で感じた人や

自然のエネルギーを形に

重松慧祐さん……海の風を頬に感じ石の中に潜む熱量を表現した

中山竜輔さん……島の人々の石に対する情熱を人体の動きとして表現したシンポジウム開催経験のない素人有志で開催したが期間中事故もなく、学生も協力いただいた島民にも満足してもらえて胸をなでおろした。私たちはシンポジウムを毎年開催しようと意気込んでいたが、美大の先生方から長続きすることが大事とアドバイスいただき2年ごとに開催することとした。

シンポジウムが終わり、学生が帰るフェリーが船着場から離れるとき、多くの島民が見送り、その中の若者が別れを惜しんで海に飛び込んだ、学生たちと島民と心の通う交流ができたのである。作品は今も石の資料館に展示されている。

美大生から2020年夏の石彫シンポジウム参加申し込みがあつたものの新型コロナで中止せざるをえなかつた。

石彫作家や美大生に何らかの支援ができるのか考えていると、戸田教授から素晴らしい提案をいただいた。

「石彫作家のドローン展をしよう」。しかし、アートに疎い私たちはドローン? ? ドローン? ? って何、から始まつた。調べてみた、「ドロー」というのは、「線を引く」という意味、「ドローイング」と呼ばれる表現は普通「線描画」と訳され、鉛筆、コンテ、ペンなどで描かれた線の集積による絵画のこと。

世界には、「版画とドローイング」の

国際コンペもあって、この方面的芸術活動は活発である。日本とアメリカの石彫

## 作家や美大生から30点の作品が寄せられた。李さんら台湾からの留学生も参加し

た、しかし新型コロナ禍で、自分の作品が展示されているのを見られないのもつらいだろうとオンラインパーティをすることになった。11月15日太郎さんが展示

備した飲み物で乾杯、自己紹介があり、アメリカからジェシー一家も参加して日本が談笑を楽しんだ。

新型コロナで、なかなかイベントをできないが11月にはフラダンス教室の生徒さん

が来てフラダンスを披露してくれた。

クリスマスにも、昨年まで毎年研究員の井手康二さんの音頭で「石の資料館クリスマスコンサート」を開催した。

倉敷にある音楽大学、くらしき作陽大学の学生さんとOBの先生が演奏や歌を披露した。

「島を元気にして」「石の文化を次の時代を担う若者に繋ぐ場にしたい」と鳴本哲也さんがK's LABOを創設した思ひが形になり続いている。

モノ言わぬ石がモノを言う、石は国を越えた人類共通の文化、楽しい世界だ。

## 島民が教えてくれた島にある「哲学の道」

瀬戸内海に浮かぶ小さな島で「この島

にも哲学の道がある、海を見ながらあれこれ思いめぐらすのもいいものだ」と島民から薦められた。

### #1 石にこめた先人の思い

海が迫る海岸の岩山の壁に文字が刻まれた大石がある。「切り出す石ハ生きも

の「山に眠る」、初めて見たとき、これは何? ぐらいでその意味まで思い至らなかつた。数えきれないほど石碑、石塔、石像、石材が島にある、滯在の都度、島民との交流が実現し、石に一生を捧げてきた石工たちにも出会つた。



石を見る目も変わり、石像や石造建築などを見ると足を止め、石に託された思いを考える楽しみができた。

## #2 巨大な石に挟まれた石像「あまのじやく」

そういう昔からあるらしい石像、土地の人はこれを「あまのじやく」と呼んでいる。「あまのじやく」とはわざと人の言にさからつて、片意地を通す者を意味するが……何を語っているのだろうか?

何をねらつて、石彫をつくったのだろうか? 誰が命名したのだろうか? 何を訴えているのだろう



うか? 考えるだけでも面白い。

## #3 海岸散歩道に積み上げられた石

海岸に積み上げられた石がある、何だろう? 廃棄石か、それにしても多い、誰の所有だろう?

ある日謎が解けた。

三代目の石材経営者鶴田さんが教えてくれた。化学を修士まで学んだ彼は、「海の塩水や風雨にさらし、石の品質検査をして

いるのだ」と。「海外からの安い石に対抗し、経年劣化の少ない白御影の気品」

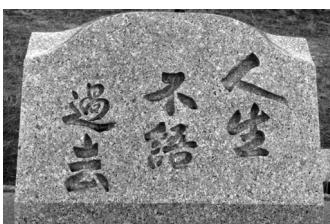
何かを語る石を訪ねアメリカに旅した。

メイフラワー号が1620年、イギリスから102名を乗せ自由を求めて、アメリカ東海岸プリマス(ボストン郊外)に上陸し、最初に踏みしめた石。ところが、記念にと、石を削って持ち帰る人が続出し、柵で囲い保護するようになった。

人は踏み石を見て何を思うのだろうか。そこの売店で売ってる土産のひとつがなんと乗船名簿。

## #4 前を向いて

高齢者が多い島、限界集落といつてもいい島。その島の先人が残した教訓を誰かが託されて作った石碑がある。島民と交流しても過去を自



慢する人などいない。

川柳、茶道、謡曲、歌、尺八、ゲート

ボール、釣りなど、明るく元気で、限界集落などと嘆かない今を生きる、前向きな人ばかりだ。島民が毎日見ている石はやはり何かを語りかけているようだ。

## #5 アメリカ「踏み石を見て何を思うのか」プリマス・ロックPlymouth Rock

